大学における病児保育の現状と今後の育児支援の課題

【目的】

乳幼児の小規模化はますます進行しており、2008年の合計特別出生率は13.7である。子どもを育む環境の変化に対応するため、1994年にはエンゼルプラン、1999年には新エンゼルプランが策定された。病児保育はその中の「乳幼児保育支援一時預かり事業」の一環として位置づけられている。2007年には「子どもと家族を支援する日本重点施策検討会議」が設置され、働き方の改革による仕事と生活の調和（ワークライフバランス）の実現が重要であると言われている。本研究においては、2007年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に基づく本学の研究プロジェクトが採択され、診（後）児保育を対象に、多様な労働形態に対応できる職場環境の構築が課題である。このような背景（後）児保育事業は、京都大学、東京女子学芸大学ですでに実験を行っている。しかし、本学の特徴はニーズに合わせたシステムの確立が必要であり、診（後）児保育等の利用の状況を把握し今後の支援の充実につなげていくために、以下の目的とした。

1. 病児保育利用のニーズと利用の状況を明らかにする
2. 職場での中学教職員が職場と家庭の両立に向けて求める病児保育の形態を明らかにする

【対象属性】

【結果】

子どもを病気で持つ家庭における児童のニーズ及びその支援活動について

<table>
<thead>
<tr>
<th>年齢</th>
<th>20歳未満</th>
<th>20歳以上</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人数</td>
<td>225</td>
<td>213</td>
</tr>
<tr>
<td>N</td>
<td>225</td>
<td>213</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【目的1】

子どもと家庭のニーズの関連

<table>
<thead>
<tr>
<th>就職形態</th>
<th>余裕</th>
<th>余裕なし</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人数</td>
<td>371</td>
<td>345</td>
</tr>
<tr>
<td>N</td>
<td>371</td>
<td>345</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【目的2】

大学内に病児保育施設があった人が利用したか？

<table>
<thead>
<tr>
<th>利用理由</th>
<th>会社</th>
<th>家庭</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人数</td>
<td>45</td>
<td>72</td>
</tr>
<tr>
<td>N</td>
<td>45</td>
<td>72</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【考察】

子どもの病気に伴う77.5％が欠勤を経験していた。また、子どもの病院・登校の遅延欠席日数は、3日以内が80％以上を占めていることから、10日間以上の欠勤が長期にわたることは考えにくい。短期間の欠席は非常に少ないが、遅延欠席は特に問題となる。医師や保育士の意見は、子どもが病気の状態に適しており、欠席の理由が医師の判断であるとされることがある。子どもが病気の状態に適しており、欠席の理由が医師の判断であるとされることがある。子どもが病気の状態に適しており、欠席の理由が医師の判断であるとされることがある。子どもが病気の状態に適しており、欠席の理由が医師の判断であるとされることがある。